

# 脱原発・放射能汚染を考える

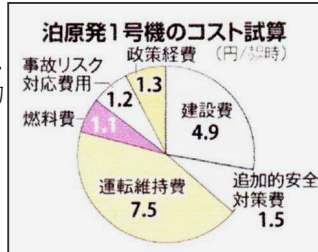
## 経済的に成り立たない原発は直ちにやめるべきだ 関電は美浜原発・大飯原発・高浜原発を直ちに廃炉にせよ

原発は、建設時の費用、立地地元への補助金、そして使用済み核燃料の処理費用、廃炉に実際に要する費用を考えれば、民間企業としては成り立たないものとなっている。これ以上の浪費は止めてすぐに廃炉にすべきだ。

### 安全規制強化で原発の優位性が揺らぐ

米国での新規原発建設をめぐる経営破たんした「東芝」英国での原発建設が経済的理由で中止した日立製作所、そして日本の原発の海外輸出は全て中止となった。

日本の既設原発の再稼働も、安全対策などで大幅な費用が必要であり、政府や電力会社が主張するような「価格の優位」は存在しない。26日の北海道新聞の大島堅一教授による調査によると、泊原発のコストは1号機が17.5円、2号機が15.1円で、石炭火力、LNG火力の1.1~1.4倍で経済的優位はない。これは関電など他の原発でも大きな差はないと思われる。



### 沖縄慰霊の日 政府への怒りが集中

1945年4月1日に米軍は沖縄本島に上陸を開始した。戦闘用艦艇が318隻、補助艦艇1139隻、上陸兵力18万3千人が参加した。6月23日に日本軍が組織的戦闘を止めるまでに、軍人軍属の死者が約12万人、そして17万人の県民が命を失った。ひめゆり部隊等の集団自決、日本軍に強制された住民の集団自決、スパイ等を疑われ殺された住民、半数が戦死したという少年の「鉄血勤皇隊」などの大きな犠牲が強いられた。そして沖縄は米軍の占領下で、多くの土地が奪われ基地にされた。そして米軍人の犯罪が多発した。

戦後26年後の1971年に沖縄は日本に「返還」されたが、米軍基地と米軍の専横は継続され、住民の苦しさはそのままであった。そして今、住民の圧倒的反対の民意を押し切って、辺野古新基地の建設が進められている。また石垣島・宮古島等には自衛隊の軍事基地が建設されている。6月23日に開かれた沖縄での戦没者追悼式では、安倍首相に対する怒号が相次いだ。

## 「原発の使用済燃料問題に関する対政府交渉 (6月21日)」の報告

6月21日の午後、参議院議員会館において、原発の使用済燃料問題をテーマとした院内集会、政府交渉、全国交流集会在持たれ、40名ほどが参加した。集会と交渉には佐賀、愛媛、関西、静岡、新潟と青森県むつ市、東海村からの運動団体の参加もあった。

政府側は、原子力規制庁の核燃料サイクル施設の審査部門、発電用原子炉の審査部門、技術基盤部から合わせて5名、資源エネルギー庁から2名、原子力委事務局から2名が参加した。福島瑞穂議員も参加した。

### ★使用済MOX燃料が使用済ウラン燃料と同等の発熱量となるのに「300年以上かかるのは事実」(エネ庁)

交渉で、一番驚かされたのが、プルサーマル発電で用いた後の使用済MOX燃料の発熱量が、使用済ウラン燃料と同等になるのに300年以上かかることをエネ庁が明言した時だった。ウラン燃料ですら、使用後15年経って発熱量が下がってからでないと、乾式貯蔵に回すことはできない。使用済MOX燃料は、300年以上経たないと再処理はおろか、運搬することも出来ないことになる。

### ★第二再処理工場の「目途は立っていない」(エネ庁)

### ★中間貯蔵・乾式貯蔵後の使用済燃料の行き先は決まっていない

六ヶ所再処理工場の稼働期間40年となっているので、中間貯蔵・乾式貯蔵の搬出時には六ヶ所再処理工場は既に操業が終っている。審査中のむつの中間貯蔵施設について、申請書の搬出先は、「契約者に返還する」としか書いていないことを規制庁に確認した。第二再処理工場の目途はたまた、中間貯蔵・乾式貯蔵後の使用済燃

料の行き場がどこにもないことが再確認された。

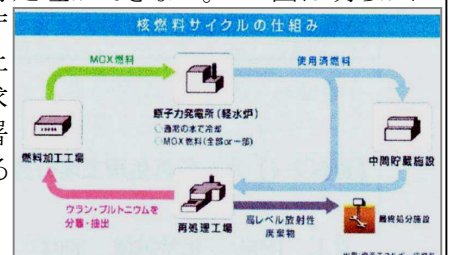
### ★プルトニウム利用計画「電事連は六ヶ所再処理工場竣工までに示すと言っている」(エネ庁)

プルトニウム利用計画は、六ヶ所再処理の稼働がなくても出さなければならない。原子力委員会決定に従うと、プルサーマルの具体的な計画がないと、再処理量を決めることも出来ないはずである。その点を原子力委事務局に質問すると、「六ヶ所再処理工場の許可も下りていない状況なので計画が立てられない」と繰り返すだけであった。国には具体的なプルトニウム利用(処理)計画はなく、事業者まかせになっていることが明らかになった。

### ★資源エネ庁の広報誌「サイクル・アイ」のウソに抗議

資源エネルギーの広報誌にある核燃料サイクル図について、以前は使用済MOX燃料が、高速増殖炉用の核燃料サイクルのための再処理工場に送られるように書かれていたものが、最新のものでは、高速増殖炉用の核燃料サイクルそのものが削除され、使用済MOX燃料は六ヶ所再処理工場に再び送られ、サイクルが回っているように描かれている。しかし六ヶ所再処理工場では、使用済MOX燃料の再処理ができない。この図は明らかにウソである。エネ庁に対して抗議した上で撤回するように求めた。エネ庁は部署が違うのと逃げるだけであった。

(以外は割愛)



## 地上イージス配備先に交付金新設へ (6/23 朝日)

秋田と山口への配置が計画され、その立地選択がためな調査によって設定されていたことが問題となっている「イージス・アショア」について、防衛省が新たな「交付金」を新設しようとしている。配備候補地の自治体に受け入れを促す狙いだという。騒音問題など生活環境悪化はないことが前提なので、環境整備法では交付できず、別の法律を整備するかが問題となっている。民意を札束で変えさせようという市民を馬鹿にした方策である。

## 「危ない活断層トップ30」に敦賀の活断層 (7/1 AERA)

雑誌「AERA」の7月1日号に「30年以内に危ない活断層30」という記事が掲載された。産業技術総合研究所が公開している。横須賀市や大分市等の直下型地震が警告されている。原発関連では19位の椿坂峠断層が日本原電の「敦賀原発」、関電の「美浜原発」の近傍、5位の石動山断層が能登半島の志賀原発の近傍である。

## 案内 大阪・花岡中国人強制連行裁判 高裁第1回口頭弁論 (7月24日 14:00~)

強制連行裁判の中で、「4/27 西松判決」を覆す主戦場は「最高裁」になると思われるが、「最高裁」における勝利のためにも高裁での弁論が決定的に重要である。控訴審の法廷を傍聴者の熱気で埋め尽くし不当判決を許すな！

## 案内 堺 平和のための戦争展 (7/27-28) ザンスクエア堺



堺では2004年から毎年「平和のための戦争展」が開かれている。今年は人形アニメ「おかあちゃん ごめんね」の上映と原作者の早乙女勝元さんと浜野絹子さんのお話がある。今回は、わだつみ会や大牟田の爆発赤痢・南京スタディーツアー報告、福島原発事故写真展なども参加して開かれる。

## 制御できない技術 福島事故が暴いた 「平和利用」の幻想

原発問題を扱った「神の火」(新潮文庫1995)以来、人間と技術を描いてきた作家である高村薫さんの寄稿文である。ぜひ朝日新聞の6月28日朝刊のオピニオン欄で全文を読んでいただきたい。とても要約は出来ないで、今回は後半の2節だけをコピーさせていただいた。確実に到来する原発の将来を考えてみたい。

### 朝日新聞6月28日 「原発と人間の限界」(寄稿) 高村 薫 より後半部を一部抜粋

さて、福島第一原発の事故は、世界の原発利用に一定のブレーキをかけたと同時に、太陽光や風力などの再生可能エネルギーの普及を大きく加速させた。では、当の日本はどうだったか。たとえば国のエネルギー基本計画を見てみよう。そこに定められた2030年度の電源構成は、再生可能エネルギーが22%、原子力が20%、22%となっているが、原発の新規制基準に伴うコスト増や、40年を超えた原発の延命の困難などを考えると、原子力の比率の20%超という数字はおよそ現実味がない。一方、再生エネの比率のほうは、2040年に全世界の発電量の40%に達するという国際エネルギー機関(IEA)の予測に比べて、明らかに低すぎる。

これはもはや科学技術の問題ではなく、経済の話ですらない。電力会社を頂点とする産業界と、永田町と霞が関の利害がいまなお不可分であり続けていることの帰結であり、三者がそれぞれ変革から逃げてきた末の、成算のない崩壊に過ぎない。そして国民もまた、長引く景気低迷と生活の厳しさに埋もれ、再び無関心のみ込まれていまに至っているのである。

とまれ、日本がこうして非常識な数字を並べている間に、世界では自然エネルギーへの投資と技術革新が飛躍的に進み、そのコストはすでに原子力の4分の1にまで下がっているとするデータもある。エネルギー分野で完全に世界の流れに乗り遅れた日本の現状は、いまや人工知能(AI)や次世代通信5Gの技術が席巻する世界に日本企業の姿がないことと二重写しになる。

この顛末は、ひとえに日本人の選択と投資の失敗の結果ではあるが、原子力の利用をめぐる不条理は日本だけの問題ではない。戦後、日本は広島と長崎の直接体験が重しとなって核兵器の保有には踏み出さなかったが、世界では核実験が地下にもぐり、さらにはコンピュータ上のシミュレーションで間に合うようになって核の保有が拡大していった。現在、世界じゅうに1万4千発もある核弾頭や443基に上る原発は、原子力が人間の身体性を伴わなくなったことの帰結でもある。

令和となったいま、その原子力を押しつけて、AIや5Gが人間の文明の頂点に君臨する。人間は日夜、モノとインターネットがつながったIoTやクラウドサービスを通してビッグデータと結びつき、世界じゅうどこにいても、スマホ一台で生活のほとんどすべてが瞬間に解決する。そして、世界を覆いつくすそのサイバー空間の外に、人類がついに満足に制御することのできなかったアノログの原発と、行き場のない核のごみを取り残されているのである。これが今日私たちのたどり着いた地平である。

巨大地震が明日起きてもおかしくないこの地震国で、あえて法外なコストをかけて原発を稼働させ続ける人間の営みは、理性では説明がつかない。次に起きる過酷事故は確実に亡国の事態に直結するが、人間は最後まで自らに都合の悪い事実は見ない。冒頭に述べた世界の原発事情も、核兵器の拡散も地球温暖化も、そういう人間の不条理な本態と、度し難い欲望の写し絵であり、それだけのことだということもできる。

仮に破滅的な事故を免れても、そう遠くない将来、使用済み核燃料の一時保管すらできなくなり、廃炉の技術も費用も十分に確保できないまま、次々に耐用年数を超えた原発が各地に放置されることになるだろう。この途方もない負の遺産を、AIが片付けてくれることはない。片付ける意思をもつことができるのは人間だけだが、果たして身体性を失った人間にそんな意思がもてるだろうか。